「舌切雀」の展開（二）

東京高等學校教授　小池藤五郎

「舌切雀」の話は、始は隣合つて住む婆さん二人の間の話で有つたが、時代が經過するにつれて、一家庭内の出來事に變化して來る。この變化に注意する時、前號（七月號）の「宇治拾遺物語」の「雀恩に報ゆる事」や寛延版「したきれ雀」の如く、二家庭間の出來事とする話を第一系統の說話とし、一家庭内の出來事とする話を第二系統の說話とする事が研究上に便利である。

第二系統に屬する話では、寶曆二年の序文がある「桃太郎物語」（讀本）の筋の中に「舌切雀」が插話となつてゐる事は注意すべきである。それは、

山陰祐太夫の一家庭内の事件で、祐太夫が救つて娘の花世に飼はせて置いた雀が、衣服に附ける糊を嘗めた爲に、花世の乳母が雀の舌を切つて逃がした。

と言ふ筋である。この說話の形は寛延版「したきれ雀」に近く、當時は大體に斯かる形をもつて語られてゐたものかも知れない。

第一第二兩系統の話の結尾を注意すると、婆が惡行を後悔して善人になつたとする話と、化物に苦しめられて死んだとする話と、それ〴〵二樣に話されてゐる。

瑞鳥園齋守翁士（賀茂規清）の隨筆「雛廼宇計木」（文化頃の隨筆、帝國圖書館藏本）も第二系統の說話である。

昔々或處に年寄の夫婦が住んでゐた。爺は正直であるが婆は慳貪邪見であつた。山で鷹に追はれ、爺の懐に逃げ込んだ雀の子を家へ持つて來て、爺は可愛がつて育てた。或時爺の留守に、洗濯物に附ける糊を雀がすつかり嘗めたので、婆は雀の舌を切つて逃がした。爺は歸つて事情を聞いて悲しみ、「舌切雀のお宿は何方ぢや」と尋ね歩いた。すると或竹藪の中から子雀の親が出て來て爺に御禮を言ひ、立派な構への家に案内して酒肴でもてなし、雀踊を踊つて爺を喜ばせた。土産には重い葛籠と輕い葛籠とを出した。爺には慾がないので輕い方を貰つて歸り、開けば中には澤山の寶物が入れてあつた。婆は事情を聞いて、爺が重い方の葛籠を貰はなかつた事を殘念に思ひ、爺の止めるのも聞かずに、やつとの事で雀の宿を尋ねあて、御馳走になり、土産物を要求した。重いのと輕いのと二個の葛籠を雀が出したので、重い方を貰つて歸つた。中からは化物が出て來て婆を氣絶させたが、婆は爺の異見で改心し、家は富み、良い處から養子を貰ひ嫁をも取つて榮えた。

次には、家藏の年代不明の黑本『舌切すゞめ』を記さう。

昔々或處に爺と婆とが住んでゐた。爺は正直、婆は慳貪邪見で慾深である。或時羽根を痛めた一羽の子雀を、爺さんが拾つて歸り、可愛がつて育てた。爺の留守に婆の洗濯物に附ける糊を嘗めたので舌を切つて逃がした。爺は子雀を尋ねて廻ると、或竹藪から子雀が出て來て、爺を我家へ案内し、色々と馳走し、雀踊をして喜ばせた。爺は二種の葛籠の内で輕い方を貰つて歸つた。婆は事情を聞いて雀の家へ尋ねて行き、重い葛籠を貰つて歸り、開けば色々の化物が出て來て婆を苦しめた。爺は「それみた事か」と婆の日頃の貪慾邪見を意見した。婆は心を改めて榮えた。

次に「童話長編」(黑澤翁滿の隨筆、安政四年刊)は童話を歌に詠じた物で珍らしい。

……　かく老いぬれど　我はもや　重きにあへんと

つゞらこの　輕きはこらずで　あへぐ〳〵　岩根さくみて
なづみつゝ　家にかへりて　かき數ふ　ふたを取れゝば
はふ蟲の　わざはひ出でゝ　むかでさし　あむかきつき
谷ぐらは　眼(マナコ)にゆまり　へみさへに　うなじまこひて
おむなは　つひに死にけり　ねじけ人の　物のむくいは
いちしばの　いちじろきかも　すむやけきかも

いさゝかの糊こいへごも庭すゞめくはずば舌もきられざらまし

は其の終の部分である。

斯うした文獻中で、最も優れた作品であり、注意すべき史料は、井上淑蔭(ヨシカゲウシ)大人が文政十年五月に武藏國川越城に近い石井の里の樫亭(ていてい)で書いた「竹の栖物語」である。この原稿こ版下こは吾人が所藏してゐる。この書は明治二十八年に「かくれ里」こ書名を變更して岡野竹園が出版した。

昔媼(オウナ)こ翁こが片田舍に貧しく住んでゐた。翁は情深い人であつたが、子供が無いので、雀を籠で飼つてゐた。媼は性質が悪く、いつも翁が雀を大事に飼ふのを憎んでゐた。或日翁が山へ行つた留守に、媼が播(ス)つて置いた糊を雀が少し嘗めたので舌を切つてしまつた。雀は、

からき世はうしほの中にのがれ入りてまたきうむぎこなるべかりしを

こ詠じ、美しい少女こなり、翁に手紙を認め、

いでゝいなば君より外にこふ人もあらし吹まく吳竹のおく

の歌を遺して何處とも知れず去つてしまつた。翁はひどく悲しみ、旅の支度をして尋ねあるき、不思議な里に尋ね入つた。其處には乙姫の樣に美しい少女が上座にゐて、翁に盃を賜はり、舞姫の舞踊で興が一入加はつた頃、少女は翁のそばへ寄つて來て、「我は君の家にやしなはれつる雀になん。刀自君のあさましきみ心におぢて、みもとをのがれ出(イデ)、今かくふるさとにかへり住(スミ)はべり」と言ひ、此處まで翁が尋ねて來てくれた恩を謝した。そして、自分の家に代々傳はつてゐる二個の皮籠(カハゴ)があるが、その一個は輕く、他の一個は重い。いづれとも御心にまかせて差上げようと言ふ。翁は輕い方を望んだので、主人の少女は、

いにしへのおもき惠にむくいてんおくる皮籠はよしかろくとも

と詠じた。翁は答へて、

淺からぬこれの皮籠のそこばくにこむるなさけや君がたまもの

と詠んだ。家へ歸つて皮籠を開くと、中には七種の寶、綾錦などが多く入れてあつた。媼はこれを見ると、直ぐに不思議の里に行つて少女に對面し、自ら皮籠を欲しいと申出たところ、少女は既に輕い方の皮籠を翁に差上げたからとて、重い皮籠を贈つた。家に歸つて開けば、寶物を翁にも分配しなくてはならないので、良い品物を早く自分の物にしようとて、媼は途中で葛籠を開けて見ると、中から大蛇の樣に首の長い法師、一ツ目小僧其の他の化物が出て來て媼を苦しめた。媼は、

うるはしき心をちゞの寶とぞかねて知りせばかゝらましやは

と詠じて死んだ。翁は末長く富み榮えた。すべて人は直き心を持つべきである。この話は自分が幼少の折に八十餘歳の翁から聞いた話である。

以上述べた外に六首の和歌が挿入されてゐる。文章は、

「むかしおうなおきな山かたつけるわたりに住けり云々」

の擬古文で、國學者の淑蔭大人の筆である故、「舌切雀」の文獻中第一の名文である。

轉じて第一系統の說話を一瞥しよう。既に述べた元祿版の「したきれ雀」があり、ついで曲亭馬琴の『燕石雜志』(隨筆、文化八年刊)が注意される。その筋は、

腹の黑い老女(オウナ)が盥の中に入れて置いた糊(ノリ)を、其の隣家の女房が飼つてゐた雀が嘗めたので、立腹して舌を切つて逃がした。雀を飼つてゐた女房は、夫と共に雀の住家を尋ねて行き、大變に御馳走になり、雀踊を見物した。土產の葛籠は老人の事であるから、特に輕い方を貰つて歸り、開いて見ると、中には金・銀・珠玉・卷絹などが澤山入れてあり、いくら取つても盡きず、家はこれが爲に富み榮えた。雀の舌を切つた老婆はこれを羨み、隣の女房に道順を良く聞いた後、雀の家を訪れた。雀は又重いのと輕いのとの二種の葛籠を出したので、重い方には寶物が澤山に入れてあると思ひ、やつとの事で重い方を背負つて家に戻つた。蓋を開くと、中から恐ろしい鬼共が多く現れて老女(オウナ)を喰ひ殺した。

の如くである。更に年代不明の「舌切すゞめ」(家藏)には、

昔々或爺さんが雀を可愛がつて飼つて置いたところ、爺さんの留守の間に、隣家の慳貪婆の糊を雀が嘗めたので、婆は怒り、舌を切つて放してしまつた。爺は「舌切雀お宿はどこだ」と尋ねて歩き、大變に御馳走になつた上、寶物の入れてある葛籠を貰つて歸り、非常に喜んだ。隣の婆はこれを見て羨み、雀のありかを尋ねて重い葛籠を貰つて歸り、開いて見ると中から化物が出て來た。化物は婆を驚かしたので、ひどく恐れて惡い心を改めた。

の樣な話が記されてゐる。

明治になつて巖谷小波山人の「舌切雀」(日本昔噺、第七編)が現れ、明治の「舌切雀」を代表する。これには初版の單行本と「改訂袖珍日本昔噺」(明治四十一年發行)の改訂合本と、「お伽夜話」(大正九年發行)中の話とがある。三者それ〴〵に差違があるが小波山人としては、明治四十一年發行の改訂版をもつて後世に貽(ノコ)さうとするものらしい。この「舌切雀」は第二系統の說話に屬し、結尾は婆の改心で終つてゐる。さりながら、婆が葛籠を貰つて歸る際に、早く中味を見たくてたまらず、途中で蓋を開く事は注意すべき特色である。此の點のみならず、一體にこの話は「竹の栖物語」に據る處が多い樣である。そして重い葛籠からは、三つ目小僧・蝦蟇入道・青大將・蚰蜒(ゲジゲジ)のお化等に變じてゐるが、いづれも蟲類と化物との混合である。

外國語にも早くから飜譯されてゐる。ダビッドタムソン譯の Shita Kiri Suzume(內題には The Taung Cut Sparrow とある。明治十八年發行)は第一系統の話の飜譯であつて、繪も文章も中々上出來の物である。終の方は、

Then when she took off the lid and looked in, a whole troop of frightful devils came bouncing out from the inside and at once tore the old woman to pieces.

の樣に、惡魔共(デビイルス)が葛籠から現れて來て、婆さんをずた〴〵に引き裂いた事になつてゐる。林弘之譯の The Old Story of Sitakiri Suzume(明治四十一年再版)は第二系統の話の飜譯であつて、插繪などは前者より劣り、終の方は爺の忠告によつて貪慾(コンヴァイヤス)な心を變じて良い人になつたとしてある。其の外にも明治三十五年頃に東京通信學院から發行した「英文お伽噺」の第六編が「舌切雀」である。これ等の飜譯書は、一方には日本の昔話を外國に傳へる目的を持つてゐると共に、他方には外國語を學ぶ初步の人が、外國の話を書いた物で學ぶよりは、善く馴れてゐる日本昔噺に據つて學べば、記憶もよく、意味も理解し易いと言ふ當時の教育的の主張から來たものと考へられる。國民童話が、この樣な目的に利用された事は、

寧ろ國民童話の根本的の價値の再認識こも吾人には考へられて誠に面白く感じられる。

以上で「舌切雀」の文獻中の注意すべき物に大體觸れたつもりである。この外には、江戸時代の黄表紙中に取入れられた「舌切雀」がある。それには吾人の言ふ「茶の脚色」・「黄表的乖離」こて滑稽的の脚色が加へられてゐる。其の代表的作品に就いては次號に述べるつもりである。其の他にも小さな史料はあるが、本論文では割愛する。

兎に角「舌切雀」の說話は、大きく、

一　家庭の關係

二　結　末

等に着眼すれば差異があるが、其の他の部分に於て大した變化は認められない。勿論それは、「舌切雀」を脚色した文藝作品を除外しての事である。

洵に國民童話に於て其の展開の跡を見來る時は、童話それ自身に於て成長があり、

たのもしやてんつるてんの初袷

は、決して童話の聞き手のみの事ではない。

（以下次號）